

[くサイトへ戻る](#)

やっと公開へ アップロードやり直し他、からの～四方山

2020年2月16日・ヘラ釣り

あと30本だったんですよ。たしかに前回の投稿時点では。ところが、データの加工を終えてアップロードし始めると、最初の5本で「File is too large」というエラーを吐かれてしまいました。ええ～？ウソだろお～？と思ってググると、ドキュメントの上限は300メガだと。聞いてないよ～（読んでないだけ）。

総量だったら三単現じゃねーだろ！っていうツッコミは置いて、[アーカイブ](#)のデータだけGoogleドライブへ移しました。画像やHTMLファイルの容量はギガ単位なんですけどね。会社の方のアカウントと合わせての600メガも使い切りそうだったので、仕方なくです。

なんともショボい仕様ですが、激速なサーバーと素晴らしい対応のサポートスタッフが魅力で、僕は三年前から利用しています。日本の会社じゃないんですね。マニュアルも随時日本語に翻訳中といった感じでしたが、最近は日本語が使えるスタッフが増えてきました。以前はいつも同じ方が対応してくださり、アンタ寝てる？休暇ある？と心配する程でした。「日本語ができるスタッフが私しかないんですよ。。」ということでしたが、ちなみにこの方は日本人です。最近はいろんな方とやりとりしますが、全員外国の方ですね。ほんのすこしだけ不思議な日本語ですが、問題ありません。相手が日本人である僕のためなのか、ラストネームで名乗っていた前任者の「彼」だったのか「彼女」だったのか不明な優しい文体は、今も記憶に残っています。出世して現場を離れたのか、それとも退社されたのか。気になりますけど聞けませんしね（笑）答える筈もないですし。

窓口の対応が素晴らしすぎると、「モノではなくヒトで買う」ということが起こります。自動車の営業なんかもそうですね。セッションを重ねていくうちに、客というより友人になったかのような錯覚を起こします。もちろん不快な意味ではなく、立場を弁えたギリギリの駆け引きになりますが、客が持つ「客は神様」意識を薄めて自分のペースに持ち込むことができれば、営業マンの勝ちです。異性だったりすると、勘違いするバカな客もいてややこしいでしょうが。まあこれって悪く言えば洗脳とかマインドコントロールの部類なんで、客側としても「本気なワケないじゃん～」なスタンスが大事なんですけど、意識的にも無意識下にも物語を求めるヒトであればこそ墮ちる罠ですね。

担当者が変わったりすると、後任の方は前任者と比較されてしまいます。ヒトどうし相性もあるので営業マンとしての出来不出来だけでは語れませんが、「前の人は良かったのに」と言われるのは辛いですよね。言っちゃ客もどうかと思いますが、今回のケースでは不思議な日本語が奏効*しています。前任者の100%を求めようという気には、そもそもならないんです。これは上手い戦略だなと思いました。

2017-10-11

「功を奏する」か「効を

奏する」か

再掲だが、ここに、
「日本文学全集」第30巻
(池澤夏樹個人編集)
『日本語のために』（河
出書房新社2016）所収の
松岡正剛「馬淵和夫『五
十音図の話』について」
(pp.261-68) から、

客の勘違いが度を越せば、矛先が後任に向かわずに前任者を「追っかけ」ます。どんなに調子の良いトークを連発してきた前任の営業マンだとしても、そういう客には流石に引くでしょう。客の目が醒めた時、相手を悪く言うのは簡単ですが、実は同罪ですから。共犯というべきかな。相手が本当にモンスターだったとしても、育てた責任、見る目がなかった責任があるのです。さらにですよ、相手が最初からモンスターだったかどうかともわからないんですよ。相手のアクションの全てが打算的だと捉えるのは、寂しい人生だと思えます。騙された方がマシかもしれないとさえ。だからって僕自身の裏切りが消せるとは思っていないです。

今回のアップロードでは、それぞれの記事を執筆した当時の自分の心情をだいたい思い出しました。ひとつひとつをじっくり読んだ訳ではないですが、あーこの時はアレが引っかかってたな、あの時はコレだったな、みたいな。恐れていたこと、怒っていたこと、悔しかったこと、悲しかったこと、嬉しかったこと。僕だって何でもかんでも書きちゃう訳じゃありませんが、直接言及しなくとも、そういうものを隠すことは出来ないようです。

それにしても、「トーナメンター、復活への道。」はメチャクチャでした。冒頭から立ち上る異常なテンションが読み手を選びます。そして、連載タイトルよりも独り歩きしている「底釣りゼミ」は、伝説となった佐原の神様、故・北城さんの名前があっこそですし、底釣りゼミあってこそその「トーナメンター、」です。個人的には他にも有用な記事はあったと思っていますが、一部を除いてゴミ。6年半も続いたことが奇跡なのです。

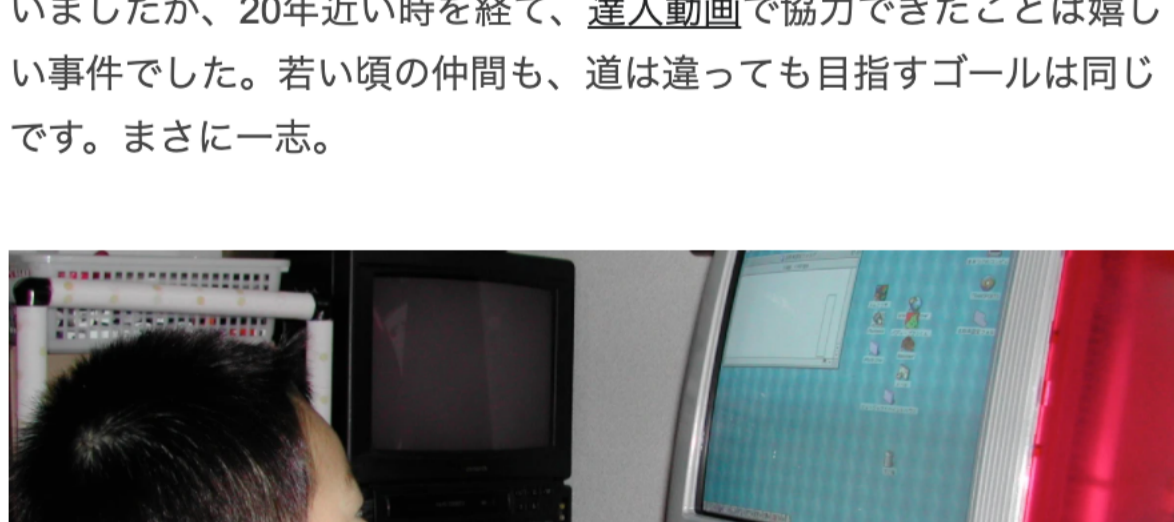
真に受けてはいませんが、たまに聞く高評価は皆さんの錯覚だと思いますよ。時間が経つと、すべては美化されるお手本のような話です。一生恨んだりするよりは水に流す日本人的な心持ちだと思いますし、他人にはそうありたいと願うものの、自分には厳しく在りたい、と。人間ですから承認欲求も勿論ありますが、底釣りゼミでさえちょっとどうなの？と感じる現在です。ただ内容的には、文章の稚拙さから来る不快感を突破してでも読んでいただければ、悩める底釣りファンへのヒントになる自負は今もあります。

底釣り、ヤバイですもんね。伝承が完全に途絶えてると感じます。関西は大丈夫なんですけど、関東が酷い。明らかにトーナメントやメーターセットの弊害でしょう。僕自身は浅ダナ全盛という弊害を食らってます。ハコ専門の名門であるゴールデングラブは、僕が入会した前年に底釣り規定の池を例会場から外しました。底釣り規定の池が激減した結果と言っても良いですが、まさにそういう時代が僕のスタートだったのです。底釣りの習得にはたいへん苦労しました。そのおかげで、底釣りゼミが書けた訳ですけどね。すんなり覚えてしまっていたら、「わからない人の気持ち」は理解できなかったと思います。トーナメントに最も熱かった時代に間に合わなかったところが残念と言えば残念ですが、競技者としての星はその程度だったのだと納得しています。

だって「トーナメンター、」に登場したゲストの顔ぶれ見てくださいよ。僕の周囲はスーパースターばかりです。等々力FCという釣場が、そういう特異性のある釣場でした。時代がそういう巡り合わせだったんですね。連載のゲストには登場しないスギタツも、大学進学を契機に神奈川へ引っ越してきましたから、等々力ではしょっちゅう竿を並べました。彼らは別世界の人たちなんだということは、どんなに釣天狗でも理解できます。身の程を知るということはこういうことだ、という。ある意味残酷な出会いでしたが、いち一般アングラーという視点に立った時、自分ほど交友関係に恵まれた者もないだろう、と思えました。

この動画は再生できません。

いつかはオナニー臭を抑えた底釣りゼミを書く必要があると思っていましたが、20年近い時を経て、達人動画で協力できたことは嬉しい事件でした。若い頃の仲間も、道は違って目指すゴールは同じです。まさに一志。



※本文と写真は関係ありません。「トーナメンター、」執筆当時つながらなだけです（笑）

2/28追記。

スギタツがこのブログを読んだのかどうかは不明ですが、2月の達人動画のテーマは再び底釣り！ニヶ月しか空けずに続編を世に出すこととなりました。今回は保科さんが出演していますが、完璧な続編となるよう協力させていただきました。もう死んでもいいかも（笑）

この動画は再生できません。